

五臣注《文選》における「重韻」問題

陳 小珍

A Discussion of Chongyun in *Wenxuan* Annotated by Wuchen

Xiaozhen CHEN

内容提要

重韻は中古音韻研究中不可回避的重要問題之一。本文全面梳理了五臣音注各等重韻存在的混切現象，并從中歸納出五臣音注的幾個韻類特徵：重韻合流、魚虞獨用、通攝一三等不混、元韻與山攝關係密切。

キーワード：《文選》 音注 重韻 韻類特徵

目次

- 1 重韻とは
- 2 一等重韻の通用について
- 3 二等重韻の通用について
- 4 三等重韻の通用について
- 5 おわりに

1 重韻とは

現代中古音韻研究では、等韻図で一等に記入された韻を一等韻、二等に記入された韻を二等韻、三等に記入された韻を三等韻、四等に記入された韻を

四等韻と呼ぶ。《切韻》系韻書の中で、16 撰のおなじ撰・おなじ開合・おなじ等呼の中に、2つか2つ以上の複数の韻部があり、これらのような韻部を重韻という。

初めに重韻の概念を提出したのはスウェーデンのベルンハルド・カールグレン (Bernhard Karlgren、中国名は高本漢) であり、“在一二等也常常有重複的韻”¹⁾と述べた。つまり、重韻を一等重韻と二等重韻に限った。この説に従って重韻を論じたのが李栄、邵荣芬、李新魁、趙振鐸、楊劍橋などである。その後さらに研究が進むにつれて、重韻の研究範囲が一等、二等重韻から三等重韻に及んできた。例えば黄典誠、方孝岳、丁鋒、馮蒸、周祖庠などである。小論という重韻は後者の説に従い、一等重韻・二等重韻・三等重韻を指す。四等韻には重韻が存在しない。

2 一等重韻の通用について

2.1 東韻一等と冬韻²⁾

	《王三》 ³⁾	五臣音注		《王三》	五臣音注
	東一	冬		東一	冬
02491 ⁴⁾ 櫻	子紅	宗 (作琮)	03381 猊	〈子紅〉	宗 (作琮)
05195 嶮	子紅	宗 (作琮)	18042 猊	子紅	宗 (作琮)

	冬	東一		冬	東一
02510 寶	在宗	叢 (徂紅)	18124 彤	徒冬	同 (徒紅)
24065 冪	莫綜	莫貢	01123 鵠	胡沃	胡穀
03599 裊	先篤	都祿			

五臣音注には東韻一等字の自用例⁵⁾は 78 例ある (平声 22、上声 24、去声 9、入声 23)。冬韻の自用例は 8 例ある (平 6、去 1、入 1)。両韻の互用例は

¹⁾ 《中国音韻学研究》1994：478。

²⁾ 小論では平声の韻目を挙げて相配する平・上・去・入の韻母を兼ねあわす。

³⁾ 《王三》には収録していない字音は《広韻》の反切を使い、〈〉で区別する。以下同。

⁴⁾ 五臣注《文選》は全部で 30 巻あり、各巻の音注には通し番号を振っている。各番号の数字 5 個のうち、左より 2 桁は巻号を表し、その後の 3 桁は音注数を表している。例えばこの 02491 は 2 巻目の 491 番目の音注を指す。以下同。

上の表で示すように、全部で9例ある。単に冬韻から見ると、自用例はわずか8例であるが、東韻一等字を反切下字に用いているものは5例あり、約38%を占める。両韻が通用していると考えられる。

2.2 泰開と代韻

	泰開	代		泰開	代
10044 藹	於蓋	愛（烏代）	10161 藹 ⁶⁾	於蓋	愛（烏代）
10211 藹	於蓋	愛（烏代）			

	代	泰開		代	泰開
03219 闕	五愛	五蓋	04292 漑	古礙	古艾
05072 暎	洛代	頼（落蓋）	10132 暎	洛代	頼（落蓋）
11070 漑	古礙	古艾	00039 概	〈古代〉	古害
03455 概	〈古代〉	蓋（古太）			

泰開と代韻の自用例は共に18例ある。両韻の互用例は上の表で示す通り、10例である。そのうち代韻字が泰韻字を直音か反切下字とするのは7例あり、約28%を占める。泰開と代韻は通用していると考えられる。

2.3 泰合と隊韻

	泰合	隊		泰合	隊
06351 沫	〈莫貝〉	昧（莫佩）	17138 沫	〈莫貝〉	昧（莫佩）
22020 沫	〈莫貝〉	昧（莫佩）	22085 沫	〈莫貝〉	昧（莫佩）

	隊	泰合		隊	泰合
03144 霽	徒對	徒外	03188 絳	子對	祖會
03425 續	胡對	會（黃帶）	03600 讀	胡對	會（黃帶）

⁵⁾ 自用例とは、帰字と同声・同韻・同声調の反切を用いることを指す。以下同。5個のうち、左より2桁は巻号を表し、その後の3桁は音注数を表している。例えば、この02491は2巻目の491番目の音注を指す。以下同。

⁶⁾ 五音注には1つの文字に対し、複数以上の音注を付ける例が散見される。これらの音注には互いに一致しているものもあれば、異なるものもある。そのため、小論では基本的に重複音注を含めて音注の出現回数を網羅的に扱っている。しかし、結論に大きな影響がある場合、説明を加える。

05088 綰	子對	最（作會）	06150 霽	徒對	徒會
06168 霽	徒對	徒會	06186 綰	子對	子會
06586 綰	子對	子會	09295 潰	胡對	會（黃帶）
10170 未	盧對	盧會	15029 未	盧對	盧會
24002 焯	七碎	子會			

泰合と隊韻の自用例はそれぞれ 30 例、14 例であるが、兩韻の互用例は上の表に見られるように重複例を除いてもまだ 10 例あり、約 19% を占める。単に隊韻から見ると、その比率は更に 41% にのぼるため、泰合と代韻が通用していることに相違ない。

2.4 覃韻と談韻

	覃	談		覃	談
01254 眈	丁含	都藍	04036 慘	七感	七敢
04144 黠	都感	丁敢	06191 菖	徒感	徒敢
09317 頡	胡感	胡敢	17099 壞	盧感	力敢
01297 駮	蘇苔	蘇臘			

	談	覃		談	覃
03277 儋	都甘	都含	10316 聃	他酣	貪（他含）
18054 魁	胡甘	含（胡南）	01293 瞰	苦濫	勸（苦紺）
04343 澹	徒敢	徒感	02205 瞰	苦濫	勸（苦紺）
04649 瞰	苦濫	勸（苦紺）	02019 盍	胡臘	合（胡閤）
09116 攏	盧盍	力合	20057 闕	徒盍	土合
22021 盍	古盍	合（胡閤）	30046 闕	徒盍	土合
03309 翽	〈徒盍〉	徒苔			

覃韻の自用例は 106 例（平 31、上 24、去 2、入 49）あり、談韻は 31 例（平 8、上 7、去 12、入 4）ある。兩韻の互用例は上の表で示すように重複例を除いても例数はやや多い。しかも、「暗」に対し、「04102 烏敢」と「04132 烏感」の 2 つの反切があり、それも兩韻が通用している傍証と見なし得よう。

更に、闕韻字は直接に「勸」で直音注をし、盍韻字は直接に「合」を反切下字としており、覃韻と談韻が通用していることは明白である。

3 二等重韻の通用について

3.1 佳開と皆開と夬開

	佳	皆		佳	皆
01205 隘	烏懈	烏介	01348 暄	五懈	五介
03039 派	匹卦	普拜	05192 隘	烏懈	烏界
09028 隘	烏懈	烏介			

	皆	佳		皆去	夬
03190 錯	苦駭	苦買	03633 韎	莫拜	莫話
01440 韎	莫拜	賣（莫懈）	17246 儻	蒲界	薄邁

	夬	皆去		夬	皆去
01350 薑	丑芥	丑介	04145 悖	古邁	届（古拜）
01180 侏	〈莫話〉	賣（莫懈）			

佳韻開口の自用例は33例（平11、上10、去12）あり、皆韻開口は30例（平9、上0、去21）あり、夬韻は3例である。三韻の互用例は上の表で示す通りに12例あり、約15%を占める。

3.2 佳合と皆合と夬合

	夬	皆去
29096 話	下快	胡怪

蟹摂の二等合口韻字はより少ない。自用例はそれぞれ佳韻5例（平1、去4）、皆韻7例（平4、去3）、夬韻3例ある。三韻の互用例は僅か1例としても、全体の7%を占める。特に、夬韻にとっては、半分を占める。開口韻を含めて見ると、蟹摂の二等韻字は通用していることが考えられる。

3.3 刪開と山開

	刪	山		刪	山
01385 菅	古顔	艱（古閑）	10196 赧	奴板	女簡
26067 赧	奴板	匿簡			

刪開と山開の自用例はそれぞれ19例（上2、去3、入14）、13例（平5、上

6、去 1、入 1) あり。互用例は 3 例で、約 8% を占める。

3.4 刪合と山合

	刪	山		刪	山
03117 綸	〈古頰〉	關 (古還)	22056 猯	戸八	胡刮
	山	刪		山	刪
04630 刮	古頰	古滑	24115 刮	古頰	古八

刪合と山合の自用例はそれぞれ 18 例 (平 10、上 2、去 5、入 1)、3 例 (去 1、入 2) あり、互用例は 4 例で、約三分の一を占める。開口韻を含めて見ると、刪韻と山韻が通用していると考えたい。

3.5 庚開と耕開

	庚	耕		庚	耕
04303 磅	撫庚	普萌	06286 澎	撫庚	匹宏
09134 澎	撫庚	普萌	09477 澎	薄庚	蒲萌
09304 澎	撫庚	普萌	01389 菑	武庚	萌 (莫耕)
06220 省	所景	所耿	10220 眚	所景	所幸
10321 榜	補孟	迸 (北諍)	07025 齧	〈鋤陌〉	牀革
03356 峯	鋤陌	蹟 (士革)	05035 磔	陟格	竹厄
16115 索	所戟	所革	17438 索	所戟	所革
23053 輅	胡格	胡革			

	耕	庚		耕	庚
01156 鏗	口莖	坑 (客庚)	04387 橙	直耕	佇生
04435 橙	直耕	直更	08123 罍	烏莖	烏庚
03678 瞿	武幸	猛 (莫杏)	01355 擘	博厄	百 (博白)
01360 櫛	古核	格 (古陌)	02003 覈	下革	胡格
13047 脈	莫獲	陌 (莫白)	27015 脈	莫獲	摸白
27062 昨	側革	阻格			

庚開と耕開の自用例はそれぞれ 52 例 (平 22、上 5、去 4、入 21)、59 例 (平 29、去 1、入 29) あり、両韻の互用例は全部で 26 例あり、約 19% を占める。庚開と耕開が通用していると考えられる。

3.6 庚合と耕合

	庚	耕		庚	耕
09328 鑽	胡盲	侯萌	01500 摶	一號	烏獲
01555 摶	一號	烏獲			

	耕	庚		耕	庚
03371 緇	戸萌	横（胡盲）	03447 鉞	戸萌	横（胡盲）
16109 繡	呼麥	呼陌			

庚合と耕合の自用例はそれぞれ9例（平1、上7、入1）、23例（平17、入6）あり、両韻の互用例は全部で6例あり、約16%を占める。両韻は通用していると考えられる。

3.7 咸韻と銜韻

	咸	銜		咸	銜
17441 闕	火斬	呼檻	29025 闕	火斬	呼檻
01020 插	楚洽	楚甲	03198 插	楚洽	楚甲
07031 箠	山洽	所甲	08286 箠	山洽	所甲
27022 插	楚洽	楚甲	29032 錡	楚洽	楚甲

	銜	咸		銜	咸
00026 監	古銜	緘（古咸）	03336 嶮	鋤銜	鋤咸
04066 嵌	口銜	苦咸	09464 嶮	鋤銜	助咸
27053 艦	胡黠	胡減			

咸韻と銜韻の自用例はそれぞれ12例（平6、上1、入5）、16例（平3、上1、入12）ある。両韻の互用例は全部で14個と、かなり多い。しかも、銜韻字は直接に咸を、嫌韻字は直接に檻を下字とし、両韻が既に通用している。

4 三等重韻の通用について

4.1 東韻三等と鍾韻

	東三	鍾
09578 汎	扶隆	逢（符容）

	鍾	東三
02560 躅	直録	直六

東韻三等と鍾韻の自用例はそれぞれ 102 例（平 12、去 1、入 89）、86 例（平 40、上 11、去 5、入 30）ある。両韻の互用例は僅か 2 例であるが、合流し始めると見なし得よう。

4.2 支_開と脂_開と之韻と微_開

	支	脂		支	脂
04089 移	弋支	夷（以脂）	04500 巖	彼爲 B	悲（府眉）B
06556 躋	去奇 B ⁷⁾	巨眉 B	10242 靡	靡爲 B	眉（武悲）B
29004 裨	府移 A	毗〈房脂〉A	11001 訾	即移	資（即夷）
01568 襪	〈所宜〉	師（疎脂）	01107 倚	居綺 B	几（居履）B
01336 錡	魚倚 B	魚几 B	01597 豸	池尔	雉（直几）
02247 褌	池尔	雉（直几）	03237 錡	魚倚 B	魚几 B
03367 劓	居綺 B	几（居履）B	03546 錡	魚倚 B	魚几 B
09050 褌	池尔	雉（直几）	09170 蟻	魚倚 B	魚几 B
09507 倚	居綺 B	几（居履）B	01559 阨	池尔	雉（直几）
01442 阨	池尔	雉（直几）	30081 艤	〈魚倚〉 B	魚几 B
02454 啻	施智	失至	10306 積	紫智	恣（資四）
20042 眞	支義	至（脂利）			

	脂	支		脂	支
01294 髻	渠脂 B	岐（渠羈）B	02025 岓	符悲 B	披（敷羈）B
10012 阨	〈直尼〉	池（直知）	10320 坻	直尼	池（直知）
02031 圯	符鄙	平彼	23104 圯	符鄙	平彼

⁷⁾ B は重紐三等を指し、A は重紐四等を指す。以下同。

	支	之		支	之
02064 漚	息移	絲(息茲)	02490 椅	於離	於其
07077 箠	直知	持(直之)	10056 崎	去奇 B	欺(去其)
10273 卮	章移	之(止而)	02115 迪	移尔	弋止
01097 倚	居綺 B	己(居以)	02012 枳	諸氏	止(諸市)
01488 批	茲尔	滓(側李)	05211 軹	諸氏	止(諸市)
01492 枳	諸氏	止(諸市)	09041 錡	魚倚 B	擬(魚紀)
09603 弛	式是	始(詩止)	10256 弛	式是	始(詩止)
23033 纒	所綺	史(疎士)	28066 軹	諸氏	止(諸市)
30005 庀	匹婢 A	匹耳	09173 迪	移尔	以(羊止)

	支	微		支	微
04659 碯	渠羈 B	巨衣	04277 埼	渠羈 B	巨依

	微	支		微	支
08077 欬	許既	虛義	08233 欬	許既	虛義

	脂	之		脂	之
16086 賚	疾脂	茲(子慈)	01104 兕	徐姊	似(詳里)
01475 兕	徐姊	似(詳里)	03168 兕	徐姊	似(詳里)
06516 兕	徐姊	似(詳里)	06118 踞	暨几 B	渠已
20026 砥	職雉	止(諸市)	10062 砥	職雉	止(諸市)
23104 圮	符鄙 B	平彼 B	18111 覬	几利	記(居吏)
09098 緞	直利	直吏	09352 肆	〈羊至〉	異(餘吏)
10221 肆	〈羊至〉	異(餘吏)	10264 肆	〈羊至〉	異(餘吏)
10298 肆	〈羊至〉	異(餘吏)	17169 賦	女利	女吏

	之	脂		之	脂
03436 颯	楚持	側眉	04405 犛	理之	黎(力脂)
04608 犛	理之	梨(力脂)	04655 嬉	許其	虛眉
09431 犛	理之	黎(力脂)	16114 詒	與之	異眉
23093 熹	許其	許眉	28038 輜	側持	側眉
30023 蓄	〈側持〉	側眉	00037 其	〈居之〉	饑(居脂)
23014 其	〈居之〉	肌(居脂)	27033 底	諸市	旨(職雉)
04566 侍	直里	雉(直几)	10118 痔	直里	雉(直几)

10227 跣	直里	雉(直几)	21070 底	諸市	指(職雉)
21079 底	諸市	旨(職雉)	24157 苾	胥里	死(息姊)
06547 眊	仍吏	二(而至)	10134 珥	仍吏	二(而至)
15043 筭	相吏	四(息利)	17274 珥	仍吏	二(而至)
21058 佻	仍吏	二(而至)	21182 餌	仍吏	二(而至)
25017 珥	仍吏	二(而至)			

	脂	微
01357 瘡	榮美	于鬼

	之	微		之	微
04614 嬉	許其	希(虛機)	08209 噫	於其	依(於機)
09196 噫	於其	衣(於機)	09391 儼	魚記	毅(魚既)

	微	之		微	之
18114 蕪	渠希	其(渠之)	03342 豨	希豈	虛己
04606 豨	希豈	喜(虛里)	18051 豨	希豈	喜(虛里)
20070 辰	依豈	於紀	01334 衣	於既	意(於記)
03094 旣	〈許旣〉	許意	09158 歛	許旣	許意

止摂開口韻の自用例はそれぞれ支韻 194 例、脂韻 102 例、之韻 99 例、微韻 18 例ある。そのうち、支脂両韻の互用例は 29 例(9%)、支之韻は 18 例(6%)、支微韻は 4 例(2%)、脂之韻は 41 例(17%)、脂微韻は 1 例(1%)、之微韻は 12 例(9%)ある。これから見ると、両韻の混同比率は高くないが、支脂・支之・支微・脂之・脂微・之微など 6 種の互用例が全て出現している。しかも、「04239 襍(移尔)⁸⁾、以示」「04444 馳(羊至)、羊氏」のような支韻の上声と脂韻の去声との互用例もあれば、「09387 植(直吏)、雉」のような脂韻の上声と之韻の去声との互用例もある。止摂開口諸韻は通用していることに違いない。

⁸⁾ () のなかは《王三》の反切であり、「,」の後ろは五臣音注である。以下同。

4.3 支合と脂合と微合

	支	脂		支	脂
03581 劑	弊隨	子遺	18116 眚	息爲	雖（息遺）
28017 墮	〈許規〉A	許惟 A	01037 詭	居委	軌（居洧）
05280 霏	息委	私壘			

	脂	支		脂	支
17257 痿	於佳 A	於爲	17398 藹	力軌	累（力委）

	支	微
09557 透	於爲	威（於非）

	微	支
09574 虺	許偉	毀（許委）

	脂	微		脂	微
02553 鮪	榮美	于鬼	03060 鮪	榮美	偉（韋鬼）
16110 洧	榮美	于鬼	09226 喟	丘愧 B	丘謂

止摂合口韻の自用例はそれぞれ支韻 50 例、脂韻 67 例、微韻 46 例ある。各々の互用例はそれぞれ支脂韻が 7 例（6%）、支微韻が 2 例（2%）、脂微韻が 4 例（3%）である。両韻の混同比率は、高くない。しかし、止摂合口韻には通用できる 3 種の互用例は全部出現し、止摂開口韻も通用しているため、止摂合口諸韻は通用していることが考えられる。また、重紐 A・B の対立に混乱はない。

4.4 真開と臻韻と欣韻

	臻	真		臻	真
03572 莘	踈臻	所巾	05156 榛	仕臻	仕巾
08055 蓁	側誦	側巾	09051 榛	仕臻	仕巾
10039 榛	仕臻	士巾	10071 莘	踈臻	所巾
10246 榛	仕臻	仕巾	17143 蓁	側誦	側巾
27011 莘	踈臻	所巾	05019 蝨	所櫛	所乙
09475 滌	阻瑟	側乙	17386 滌	阻瑟	側筆
27004 蝨	所櫛	山乙			

真韻開口と臻韻の自用例はそれぞれ 173 例、12 例あり、互用例は上の表で示すように 13 例がある。全体から見ると少ないが、自用例が僅か 12 個の臻韻にとって、互用例が半分以上を占めることから、両韻が通用していると言える。

	真	欣		真	欣
14003 憫	眉隕	眉隱	30036 愁	魚覲	魚斬
08089 愁	魚覲	魚斬	21014 僅	渠遶	其斬
29083 愁	魚覲	魚斬	30029 愁	魚覲	魚斬
30035 愁	魚覲	魚斬			

	欣	真		欣	真
03438 沆	許訖	虛乙	06035 屹	魚迄	魚乙
06064 屹	魚迄	魚乙	04064 仡	許訖	魚乙
06099 仡	許訖	魚乙			

欣韻の自用例は僅か 7 例であるのに対し、真韻字を反切下字とする例は 6 例である。両韻が通用していると考えられる。他に、また臻韻と欣韻の混同例が 1 例あり、次の通りである。

	櫛	迄
04286 漣	阻瑟	阻乞

以上から真_開と臻韻と欣韻の 3 韻は通用していると考えられる。

4.5 真_合と文韻

	真	文
11068 磨	〈居筠〉	居雲

	文	真		文	真
06543 簣	〈王分〉	筠（王麿）	01574 欸	許物	許律

両韻の自用例はそれぞれ真韻 65 例、文韻 71 例ある。互用例は僅か 3 例（2%）であるが、両韻が合流し始めると見なし得よう。

4.6 元開と仙開

	仙	元		仙	元
01283 騫	去軋	軒（虚言）	13070 蹇	居輦 B	居偃
30068 竭	去竭 B	去謁			

元韻開口の自用例は12例あり、仙韻開口は156例である。両韻の互用例は3例である。

4.7 元合と仙合

	仙	元		仙	元
08051 浚	王權	爰（韋元）	17020 浚	王權	爲元
17389 浚	王權	爰（韋元）	30062 變	力亮	力婉

元韻合口の自用例は92例あり、仙韻合口は83例である。両韻の互用例は開口韻と同様に3例ある。

元開と仙開、元合と仙合の互用例はそれほど多くはないが、元韻は仙韻との密接な関係を暗示している。

4.8 尤韻と幽韻

	尤	幽		尤	幽
04129 繆	〈力求〉	力幽	03383 鸚	力救	力幼

	幽	尤		幽	尤
02482 彪	甫休	筆尤	03279 羸	甫休	必由
06588 繆	居蚪	居由	09473 彪	甫休	筆尤
13015 繆	居蚪	吉留	06105 繆	渠糾	於酉
03566 黝	於糾	一柳	04425 繆	渠糾	岐酉
14062 繆	靡幼	亡又	21076 繆	靡幼	蜜救

尤韻と幽韻の自用例はそれぞれ149例、18例ある。そのうち、幽韻字が尤韻字を反切下字とするのは10例あり、半分以上を占める。しかも直接に「幽」を尤韻字、「尤」を幽韻字の反切下字に用いており、両韻が通用していると考えられる。

5 おわりに

5.1 五臣音注では一等、二等、三等重韻がそれぞれ合流

《切韻》系韻書から帰納した重韻は全部で 25 組あり、そのうち一等韻 4 組、二等韻 7 組、三等韻 14 組である。五臣音注では、遇撰の魚韻と虞韻、蟹撰の廢韻と祭韻、梗撰の庚韻と清韻、咸撰の鹽韻と嚴韻と凡韻を除いて、ほかの 19 組の重韻はそれぞれ通用する例があり、次の通りである。

等呼	通用の例数
一等	東冬 9、泰 _開 代 11、泰 _合 隊 16、覃談 20
二等	佳 _開 皆 _開 夬 _開 12、佳 _合 皆 _合 夬 _合 1、刪 _開 山 _開 3、刪 _合 山 _合 4、庚 _開 耕 _開 26、庚 _合 耕 _合 6、咸銜 13
三等	東鍾 2、支 _開 脂 _開 之 _開 微 _開 105、支 _合 脂 _合 微 _合 13、真 _開 臻欣 26、真 _合 文 3、元 _開 仙 _開 3、元 _合 仙 _合 4、尤幽 12

この表に見られるように、重韻の通用範囲は一、二、三等に及び、数もすくなくないため、五臣音注において各等重韻は合流すると考えられる。そのうち、特に止撰 4 韻の混同、洽韻狎韻の通用などは注目すべきである。

韻部の合流は五臣音注の特徴の 1 つであり、中古音韻の発展傾向を反映する。

5.2 通撰の一、三等重韻がそれぞれに通用するが、互いに混同しない

前述のとおり、東韻一等と冬韻、東韻三等と鍾韻はそれぞれに通用するが、一等韻と三等韻は混同しない。

通撰 3 韻の通用は中古音韻史上においては一般的な現象であり、例えば邵榮芬 (1963 : 315)、丁鋒 (1995 : 61)、周祖庠 (2001 : 8) にはその通用が見られる。董宏鈺 (2012 : P79) でも“可以認為《文選》五臣注中的三韻已有混同的趨勢，暫將東冬鍾三韻合併。”と述べている。小論では“三韻已有混同的趨勢”には同意見だが、“暫將東冬鍾三韻合併”についてはさらに検討する余地があると思われる。

羅常培《唐五代西北方音》の通撰においても同様に一等、三等韻がそれぞれに通用するが、互いに混同していない。

5.3 魚韻と虞韻が通用しない

五臣音注には魚韻字は約121例（平60、上45、去16）、虞韻は約127例（平64、上40、去23）ある。前に述べたとおり、五臣音注において各等重韻はほぼ通用しているが、魚韻と虞韻は合計248例あるのに、互用例は1つもない。丁鋒1995：55は“魚虞必定一開一合，否則無法解釋同等同呼在其他大批韻組裏都混同的音系裏，它們毫無牽連。”と論じた。とすれば、模韻と互用例がいくつかある虞韻は合口韻に属すると推測できる。

《顔氏家訓・音辞篇》には“北人以庶為成，以如為儒”との記述があり、つまり北方では魚韻と虞韻が同音になっていたということを意味する。しかし、慧琳《一切經音義》、唐五代西北方音などの資料には魚韻と虞韻が通用する例も僅かしかない、両韻が混同する根拠になるのをするまでにはまだ検討の余地がある。顔氏のこの論述は当時の北方のある方言に対する説であると理解すればよからう。

5.4 元韻は仙韻と通用するが、臻撮韻と混同しない

《切韻》系韻書では、元韻と「真諄臻文欣魂痕」などの諸韻とを一緒に配列するため、《経史正音切韻指南》ではこの8韻を同じ臻撮に記入している。しかし、五臣音注ではこれと異なり、元韻と仙韻は重韻として通用している。実は、《韻鏡》でも元韻を山韻、仙韻と同図としている。史存直（1997：211-235）、馬徳強（2011：29-32）では元韻の配列位置に対し、韻書と韻図のこの違いは南北言語の差異であり、元韻は山撮に属するのが北方言語の特徴であると指摘している。

参考文献

- 羅常培 1933《唐五代西北方音》國立中央研究院歷史語言研究所
邵榮芬 1963〈敦煌俗文學中的別字異文和唐五代西北方音〉《中国語文》第3期
藤堂明保 1980『中国語音韻論—その歴史的研究—』光生館
丁鋒 1995《〈博雅音〉音系研究》北京大學出版社
史存直 1997《漢語音韻學論文集・關於“該死十三元”》華東師範大學出版社
周祖庠 2001《篆隸万象名義研究》第一卷上冊 寧夏人民出版社
馬徳強 2008〈重韻研究〉復旦大學博士學位論文

陳 小珍「五臣注《文選》における「重韻」問題」

馬德強 2011 〈中古元韻問題述論〉寧夏大学学报（人文社會科学版）

董宏鈺 2012 〈陳八郎本《昭明文選》五臣音注研究〉長春師範学院碩士學位論文